関西自然保護機構会報17(1)：67－69，1995

近江八幡水郷めぐりと琵琶湖湖岸の観察

京都市衛生公害研究所　竹之熊　国　八[1)]

A BOATING EXCURSION IN A LAKESIDE DISTRICT OF LAKE BIWA AROUND OHMI-HACHIMAN

Kunihachi TAKENOKUMA　*Kyoto City Institute of Health and Environmental Sciences.*

「今日は何センチ？」，「今日は何センチまで下がったかしら？」などという言葉が挨拶がわりに交わされるようになっていました。それ程琵琶湖の水位が気になり始めていました。昨年９月初めのことです。KONC 事務局から，その水位低下で気掛かりな琵琶湖湖岸の様子を見に行きませんかというおさそいがあったのは９月中旬のことでした。

実は，９月以降私は下阪本方面へ３回程足を運び，湖岸線が顕著に後退して行く様子を見ていました。マスコミの報道につられて，湖岸底から出現した坂本城の石垣を見に行ったりもしましたがそういう場所では，干上がった湖辺に堆積する藻の多さに驚く前に，引きも切らず訪れる人の多さに驚く始末でした。

KONC NEWS の「おさそい」にある近江八幡から大津にかけては，ここ数年行っていないこともあり，種々観察するのにいい機会であると考え参加させて頂くことにしました。

さて，その当日・10月23日は快晴。集合時刻は「円山」バス停前10時20分。参加者は申し合わせたように八幡駅前９：40発のバスに乗りました。途中「豊年橋和船のりば」という停留所があり，車窓からなつかしい和舟の姿が見えました。もうその辺りから，水郷めぐりの雰囲気がひたひたと迫ってくるようでした。「円山」バス停はそこから三つ目。円山の舟のりば（写真１）の前庭で点呼が済むと，予定より少し早めに乗船することになりました。船は手こぎの和舟（６人乗り）とエンジン船（12人乗り）。はじめに和舟に定員いっぱい乗って，残りの“非和舟組”は皆エンジン船に乗船。おおらかでおだやかな船出でした。

船はヨシ原の中の広くなったり，狭くなったりする水路を進みます。岸辺で目につく主な樹木はマルバヤナギで，中には相当の樹齢を感じさせるものもあります。岸辺の近くには，所々でホテイアオイが大きな群落を広げています（写真２の右半分の部分，ヨシ帯の手前に細く帯状に見えているのがホテイアオイの群落）。陸上の方に目を移すとセイタカアワダチソウの黄色い花穂がすすきの穂と共に大きく波打っていて，秋の彩りを添えています。船の上ではそれほど風が吹いているようには感じなかったのですが，何となくひんやりした感じがつのってきて「ここで熱燗１杯，悪くないな」などと，つい思ってしまいました。

和舟よりずっと後から出発したエンジン船でしたが，20分とたたない中に追いつき，追い越して行きました。なにしろ，和舟は「日本一遅い乗り物」というのがキャッチフレーズ。そして，その遅さが，不思議にこの水郷にはよく似合うのです。和舟の船頭さんが，たまたま婦人だったからでしょうか，エンジン船の船頭さんはエンジンを止め

関西自然保護機構業績　第151号
1) 現所属　京都工芸繊維大学

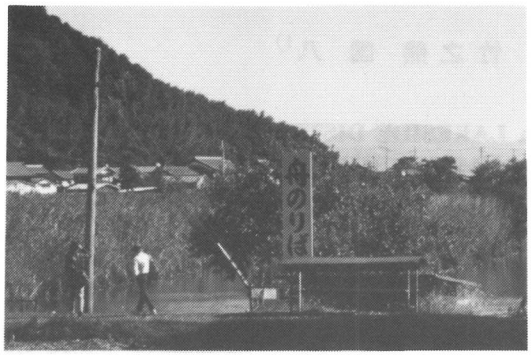


写真1　円山の舟のりば前の景観.



写真2　参加者の乗っている和舟とその背景（西の湖）.

て和舟を待ち，ロープを渡し牽引して再出発しました。彼の話では，船頭さんの中には90歳近い高齢者もおられるとのこと。このような場所でギィッチラ，ギィッチラ櫓を漕いで暮らすのは，健康保持の上で理想的なのかも知れません。

およそ30分の航行で開けた場所に出ました。安土の方も広く見渡せました。船頭さんの説明によると，そのすぐ先に真珠養殖場があるとのこと。琵琶湖の水位が下がっても，西の湖は堰があるため水位はほとんど変わっていないとのこと。5分程停泊して，藻の採集などをし，復路につきました。往路でも見かけたカイツブリの幼鳥が1羽，船の運航でできる波を避けるように，水路の端にひっそりと浮いていたのが印象的でした。

下船するとすぐ，昼食をとるために滋賀厚生年金休暇センターへ。徒歩で約15分。途中，山側にヴォーリズ記念病院と書かれた清楚な感じの建築物があり，目を引きました。滋賀県のことにうとい私は，ヴォーリズ（ウイリアム・メレル・ヴォーリズ）が近江兄弟社の創立者で，有名な建築家でもあったことや彼の遺品を展示した資料館（一柳記念館）が近江八幡市にあることなど，その時はまだ知りませんでした。厚生年金休暇センターのロビーでは正装した花婿・花嫁，両家の人達でかなり込みあっていました。その人達に混じってリュク姿の私達がうろちょろするという奇妙な取り合わせとなりました。結婚式のラッシュから抜け出たのは午後1時半。玄関前で待ち受けていた琵琶湖観光小型貸切バスに乗り込みました。

バスが走りだすとすぐ，琵琶湖博物館開設準備室の中井克樹氏が，その日の観察会のために作成されていた資料を配布され，それを見ながらバスの走行ルート，内湖干拓の経緯，西の湖の生物などについて解説されました。この時宜を得た解説のお陰で，内湖の干拓事業がどれ程大規模なものであったか，その干拓地のどこを走行しているのかリアルタイムで知ることができました。大中の湖の干拓地を南北に貫通する道路を走行した時は文字通り定規を引いたような真っすぐの道が，延々と続いているのに驚きました。30分程で宮ケ浜に到着し，波打ち際で各々貝類や藻の採集を行いました。20分程の採集が済んで，緩やかに傾斜した砂浜をバスの方まで戻りかけた時，砂地の上で動く小さな黒い生きものを見つけました。クロナガアリでした。多数の個体が出入りしている巣孔も見つけたので，フイルムに納めておきました。

私にとっては，うれしい収穫となりました。

バスが走りだすと，中井氏は宮ケ浜で採集した貝類をビニールの小袋に分類して入れたものを示しながら，それぞれの種類について分布，形態上の特徴などについて話されました。その中には，導水管の通水障害を引き起こすとして憂慮されているカワヒバリガイも含まれていました。この貝が，既に宮ケ浜にも分布域を広げていることを知り驚きました。

さて，バスは湖周道路から草津市の最北端・烏丸半島へ。ここは琵琶湖総合開発で大きく造り変えられた約36haの広大な土地。建設工事中の国連環境計画（UNEP）国際環境技術センター，県立琵琶湖博物館（仮称）などを眺めた後，凧の舞う多目的広場を横断し，レイクポートまで足を延ばしてみました。この地が琵琶湖リゾートネックレス構想でのリゾート拠点の一つとして計画されているだけに，レイクポートの建設には破格の投資が行われたという印象をもちました。

このさながら人工島のような烏丸半島を後にしたバスは，近江大橋経由，一路大津駅へと向かったのでした。

この観察会を準備し運営して頂いた方々に感謝の意を表して終わらせて頂きます。